

# 居場所の条件

—高齢者の居場所から大学生の居場所を考える—

What are necessary for “Ibasho”?

—from the elderly to the university students—

西川 真理子\*  
Mariko Nishikawa

居場所とは何か？大学が学生にとって「居場所」となるには何が必要か？世代によって「居場所」に必要な条件は異なるのか？本稿では、高齢者にとっての「居場所」の条件を考察することで、世代を超えて「居場所」に必要な条件を提案し、改めて大学生において大学が「居場所」になるには何が必要かを明らかにする。

「居場所」となるために必要な条件は、そこに①受容感、②自己効力感、③自己有用感があるかどうかであり、大学が学生にとって「居場所」となるために必要な条件は、特に、①受容感（帰属意識）と②自己効力感だと考える。

キーワード : 居場所、受容感、自己効力感、自己有用感、高齢者、大学生

## I. はじめに

筆者には認知症の家族がおり、数年前、うつ症状、食事・入浴拒否、暴言といった認知症の周辺症状<sup>1)</sup>に困っていた。その後介護認定を受け<sup>2)</sup>、デイサービスを利用することになり、デイサービスでさまざまな手伝いをするのが『生きがい<sup>3)</sup>』となり、デイサービスに行くようになってから、うつ症状、食事・入浴拒否はまったくなくなった<sup>4)</sup>。

このような本人の変化を見てきて、筆者は、デイサービスに通い、手伝いをすることによって人の役に立てる、ということが本人の「生きがい」になったこと、それとともに、デイサービスが本人にとって「居場所」になったことで、本人が落ち着き、幸福感を得たことを実感した。

人はいくつになっても「居場所」「役割」が大事で、「居場所」や「役割」があつてこそ心身ともに健康でいられるのだということを確認するとともに、ある場所が「居場所」となるには何が必要なのか、ということに強い関心を持つようになった。

本稿では、高齢者にとって、そこが「居場所」となるには何が必要なのかを考えることで、「居場所」に必要な条件を明らかにし、「居場所」には世代によって求められる条件に違いはあるのか、

---

\*流通科学大学経済学部，〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

あるとしたらどういう違いがあるのかを次に考え、最後に、大学生にとって、大学が「居場所」になるにはどういう条件が必要なのかについて探究していきたい。

## Ⅱ. 高齢者の居場所

### 1. 高齢者の居場所

高齢化率が 26.7%<sup>5)</sup> (2015 年 10 月 1 日現在) という超高齢社会の日本では、高齢者の社会的孤立<sup>6)</sup>が問題になっている。

高齢者の社会的孤立を防ぐために地域では居場所づくりが進められている。内閣府の「平成 23 年度高齢者の居場所と出番に関する事例調査結果」によると、「地域の高齢者が自ら進んで出かけられる『居場所』をつくる取組について」では、「憩いや語らいの場 (たまり場)」「趣味 (スポーツを含む) の集まりの場」は、それぞれ半数近くの市町村が実施している。1994 年には、地域での「仲間づくり」、「出会いの場づくり」、「健康づくり」を進めるために、全国社会福祉協議会が提唱した「ふれあい・いきいきサロン活動」が始まり、2012 年 4 月時点で全国に 60,000 か所を超えたが、大多数が高齢者向けのサロンとなっている<sup>7)</sup>。各市町村の社会福祉協議会が支援する「ふれあい・いきいきサロン」活動は、高齢者の社会的孤立解消に効果が認められるものの、民生委員などがボランティアで運営しているため、月 1~2 回、多くても週に 1 回の開催がほとんどで、高齢者が行きたいときに行けるという状況にはなっていない点は大きな課題だと考える。

### 2. 高齢者の居場所としての成功例

筆者は、「高齢者の『居場所づくり』の成功例の取材レポート」というテーマで、所属する流通科学大学の平成 27 年度特別研究助成費の支援を受け、世間で一般的にシニアの居場所の成功例とされている、平日はほぼ毎日開いている『常設型』の高齢者の居場所のうちのいくつかを見学し<sup>8)</sup>、運営者<sup>9)</sup>から話を聞き、高齢者の「居場所」に必要な条件を探った。

ここでは、それぞれの居場所の概要と聞いた話の中で居場所になるための条件として参考になる部分をまとめてみたい。

#### a. ひがしまち街角広場

設立:2001 年 9 月

場所:大阪府豊中市新千里東町 3-6-111 千里ニュータウン新千里東町近隣センター内空き店舗

開所時間:月~土 11:00~16:00

サービス:飲み物、委託販売 (竹酢液・竹炭、千里絵葉書、千里ニュータウンガイド)、

イベント (4 月たけのこ祭り、10 月周年記念パーティ)

運営:最初は豊中市の社会実験というかたちでスタートし、社会実験期間終了後 2002 年豊中市から独立し、以降自主運営、地域住民ボランティアスタッフ約 20 名

**b. みんなの居場所「須磨いるサロン」**

設立：2012年4月

場所：兵庫県神戸市須磨区須磨浦通3-3-16

開所時間：月～金 10:00～16:00

サービス：飲み物、教室・講座、囲碁・麻雀、リサイクル品

運営：特定非営利活動法人 福祉ネットワーク西須磨だんらん<sup>10)</sup>

**c. 東灘こどもカフェ「こもれど」**

設立:2011年4月

場所：兵庫県神戸市東灘区甲南町3-7-14 城野ビル1階

開所時間：毎日（月～日） 10:00～18:00

サービス：昼食、飲み物、講座、イベント（子ども食堂、朝カフェ、二水会、おやつ寺子屋、おもちや病院など）

運営：東灘こどもカフェ<sup>11)</sup>（2016年4月15日現在 会員数のべ476名）

**d. シェア金沢**

設立:2014年3月

場所：石川県金沢市若松町セ104-1

施設：児童入所施設、サービス付き高齢者向け住宅、学生向け住宅、レストラン、Café & Bar、天然温泉など

運営：社会福祉法人佛子園

**e. 富山型デイサービス「にぎやか」**

設立:1997年

場所：富山県富山市綾田町1-10-18

開所時間：毎日 8:00～18:00（22名）

サービス：デイケア

運営：特定非営利活動法人 にぎやか<sup>12)</sup>

**f. 三草二木西園寺**

設立:2008年1月

場所：石川県小松市野田町丁68番

サービス：高齢者デイサービス、生活介護、就労継続支援B型、西園寺カフェ、西園寺温泉・湯治リラクゼーション、講座、駄菓子屋、定期市（農作物、手工芸品）、イベント（新年会、春・秋祭り、子供会、敬老会など）、ライブ・コンサート、働く場（ワークシェア）など

運営：社会福祉法人佛子園

### g. おたがいさん

設立:2001年3月

場所:神奈川県藤沢市亀井野 4-12-93

サービス:小規模多機能型居宅介護

運営:株式会社あおいけあ<sup>13)</sup>

**ひがしまち街角広場**は、「いつでも誰でも、何の目的もなく訪れて、自由にゆっくり過ごせる」「緩やかな見守りの場所」というコンセプトで地域住民のボランティアによって運営されている。曜日ごとに決まった2名のカフェスタッフが丸1日担当するため、利用者も顔見知りになりやすく、安心感がある。スタッフもテーブルに付き、運営側と客という関係ではなく、対等の関係であることを心がけている。1日に3回くらい来る人もいるということだ。毎日特にイベントもなく、メニューも飲み物だけで、気軽に寄って、話したい時には話すこともできる、自由に過ごせるスペースである。

**須磨いるサロン**は、毎日午前午後教室・講座が1つずつ入っている。パソコン教室、ハガキ絵教室、ミシンカフェ、パッチワーク講座など、運営者が講師を見つけて来て、開催している。飲み物を飲むこともできるが、講座を受ける目的で来る人がほとんどである。ただし、リサイクル品をのぞきに來るだけの人もいて、その中から講座を受けるようになることもある。運営している特定非営利活動法人「福祉ネットワーク西須磨だんらん」の強みを生かして、生活の困りごとや福祉サービスの利用方法などの相談にも随時応じている。

**こもれど**も須磨いるサロン同様、毎日のように講座がある。ただし、講師は外から呼ぶのではなく、こもれどの利用者だ。ある時は生徒であっても、ある時は自分の得意分野を生かして先生になる。また、毎日昼食を提供しているということも特徴的だ。こもれどには大きなテーブルが1台しかないの、一人黙々と食べてもいいし、おしゃべりしながら食べることもできる。84歳の会員男性は、週3回カフェから片道25分のところに住む87歳の高齢者女性のところに弁当を宅配している。それは高齢女性にとっては緩やかな見守りでもあり、彼にとってはやりがいになっている。また、代表、副代表が男性というのものもあるかもしれないが、男性の利用者が他に比べて多い。特に、月1回、地元商店街の美味しいものをさかなにお酒を飲む「二水会」は男性に人気だ。毎月第1,3水曜日は朝7時から周辺地域を掃除し、その後朝食を食べる「朝カフェの会」を実施している。2016年5月からはコープこうべからの食材提供を得て、こどもカフェ(子ども食堂)も始めた。代表の中村保佑氏が、「個人が楽しむ居場所から、地域のニーズに応える活動が徐々に広がり、会員がボランティアとして『地域に出ていく、役割を果たす』ことも多くなってきた」と述べる<sup>14)</sup>ように、活動が社会的参加、社会貢献の域にまで及んでいる。

**シェア金沢**は、高齢者、大学生、障がいのある人がともに住んでいる街だが、住民だけでなく、

地域住民たちが楽しく集えるように、天然温泉、レストラン、ライブハウスなどのアミューズメント施設、産前産後ケア施設、スポーツ施設なども街の中にある。日用品や生活雑貨を販売している売店では、高齢者も働いており、パンや駄菓子を買いに来る子どもたちとの交流が見られ、働いている高齢者は生き生きとしていた。

**にぎやか**は、赤ちゃんからお年寄りまで障害のある人もない人<sup>15)</sup>も住み慣れた地域で共に暮らせる在宅福祉サービス「富山型デイサービス」を提供している施設である。「富山型デイサービス<sup>16)</sup>」というのは、これまでの福祉サービスでは、高齢者は高齢者介護施設、障がい者は障がい者施設、児童は保育所など、縦割りで別々だった施設が、「地域共生」の視点から「家族のように過ごせる第二の我が家」「近所の家に遊びに行く感覚」「いつでも誰でも受け入れ可能」という小規模、多機能、地域密着型のひとつの施設に統合されたものである。にぎやかに着いてお茶を出してくれたのも、近くの公民館で20数名ごとに施設見学会が開催され、そこで説明をしてくれたのも利用者である認知症高齢者や障がい者だったのには驚いた。利用者の中には自分のできることは手伝っていて、利用者とスタッフが見分けられないことが多く、この施設に通うようになって介護度が下がった利用者も多いという話にも納得した。

**三草二木西園寺**は、高齢者と障がい者のデイサービスが同じフロアで営まれているのは、富山型デイサービスに似ているが、富山型デイサービスが両者が一つになっているのに対し、西園寺の場合は活動は別々であるところが異なっている。また、にぎやかと異なり、施設利用者以外の一般の地域住民の利用が多いのが特徴的だ。それは、同じ敷地内にある西園寺温泉や湯治リラクゼーション、西園寺カフェ、講座などを利用する人が多いからである。また、西園寺内では、西園寺カフェをはじめ、障がい者が健常者とともに働いている。さらに、定年でリタイア後のまだまだ元気な人たちが「できる仕事をやれる範囲で」と漬物づくりや剪定などで西園寺を支えている。西園寺のみそ、梅干し、漬物類などの西園寺の特産品は西園寺で販売しているだけでなく、通信販売もしている。

あおいけあが運営している**おたがいさん**など3つの高齢者施設は、地域に開かれた場所にするため、敷地内の塀が取っ払われ、敷地内にある一本道は地域の人々の通路となっている。あおいけあの施設の利用を利用している高齢者は、公園の清掃や草抜き、児童の登下校の見守りなどのボランティアをしている人が多い。また、おたがいさんの玄関には小さな駄菓子屋があり、認知症の高齢者が店番をし、子どもが計算をして運営している。「草団子の会」や「流しそうめんの会」などのイベントの時は、高齢者は子どもと一緒に準備をしながら模擬店で自分たちの手作りの物を売ったりする。あおいけあ代表の加藤忠相氏は、「地域参加すれば『被介護者』は『社会資源』になる。地域の中で役割を果たすことで自分が生きる価値を実感できる」と言う。近所の人や施設スタッフから「ありがとう」「ご苦労さま」と言われながら、施設の高齢者たちは生き生きと輝いている。

### 3. 高齢者の居場所の条件

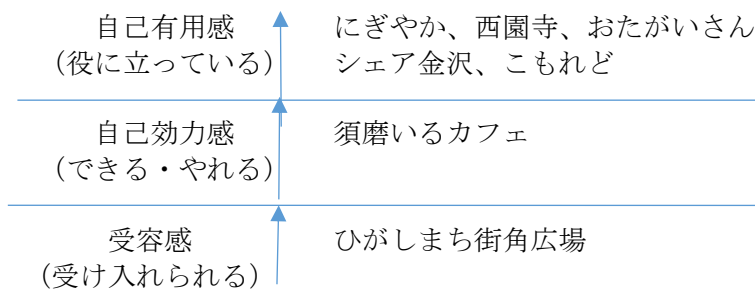
いくつかの高齢者の居場所を見学し、話を聞く中で、高齢者にとっての「居場所」の条件を考えてみたい。

まずは、「いつでも自分を受け入れてくれる場所」だということがあるだろう。そこには「受け入れてくれる人、仲間がいる」ということでもある。これが最低条件といえるだろう。

しかしながら、「ただ行ってお茶を飲んでしゃべるだけ」という場所は、「刺激がない」「飽きた」ということで足が遠のく人も少なくないという。そこで、飽きずに継続して来てもらうために、講座・教室やイベントを実施し、参加型の居場所にするところも多い。須磨いるサロンやこもれど、西園寺の講座に通う高齢者は学ぶこと自体やそこで仲間やつながりができることが楽しくて参加する。学ぶことで、自身の成長を感じ、自分は「できる」という「自己効力感」が、仲間ができることで「受容感」も得られ、そこに行くのが楽しくなるのであろう。

さらに、こもれどのように自分が先生になったり、こもれど、シェア金沢、にぎやか、西園寺、おかげさんのように、自分が地域の人や地域のために働いたり、自分に『役割』や『出番』があったりすることで、「自分は役に立っている」という「自己有用感」が得られる。このような場所は、自分にとってなくてはならない場所となるであろう。

それぞれの場所から利用者が得ることができる感情は次のようにまとめられる。「受容感」→「自己効力感」→「自己有用感」はそれぞれ包摂関係にあり（下図）、上になるほど、充実感が増すことが予想される。「自己効力感」が得られていれば「受容感」も得られており、「自己有用感」が得られていれば、「自己効力感」「受容感」も得られている。



以上のことから、高齢者の「居場所」に必要な条件は、いつでもそこに行くことができ、その場やそこにいる人たちに受け入れられているという「受容感」、講座や教室で学ぶことを通じて、「自分は成長している」「まだまだ成長できる」という「自己効力感」、さらには、「人や社会の役に立っている」という「自己有用感」があるといえ、「受容感」→「自己効力感」→「自己有用感」となるほど、そこから得られる満足感は大きくなるといえる。

### Ⅲ. 居場所とは

## 1. 「居場所」とは

ここで、改めて「居場所」とは何か、ということを考えてみたい。

石本（2009）<sup>17)</sup>によると、「居場所」という言葉は、もともと「居る場所」を表す言葉であり、物理的な場所にすぎなかったが、現在では、「心の安らぐ場所」「自分らしく居られる場所」などのように心理的な意味をもつ居場所という使い方が一般的になっているという。物理的な場所があっても「居場所がない」というのは、「居場所」が『心理的な』居場所として使われていることを示している。

このように「居場所」が心理的な意味で用いられ始めた背景には不登校の問題があるという。1980年代に不登校の児童や生徒が安心して居られるフリースクールのような居場所が注目されるようになり、文部省も1992年に不登校に関する報告書を出し、その中で、学校が「心の居場所」の役割を果たす必要性があることを提唱している（文部省初等中等教育局）。

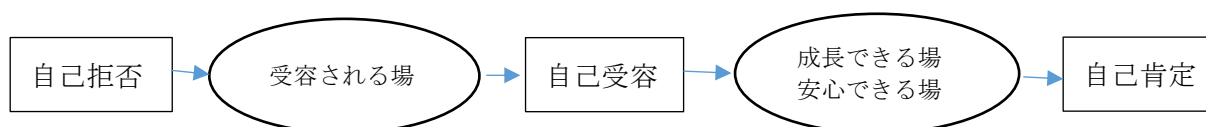
## 2. 「居場所」の条件

発達心理学の分野では、石本（2010）<sup>18)</sup>が、「居場所」であることを測る尺度として、「ありのままにいられる」という「本来感」と、「役に立っていると思える」という「自己有用感」の2つを挙げている。

青年心理学の分野では、吉川・栗村（2015）<sup>19)</sup>が、「受容される居場所」と「成長できる居場所」が大学生のアイデンティティの確立に関係する居場所であることを述べている。

臨床教育学<sup>20)</sup>の立場では、「居場所とは子どもにとって自分の気持ちを理解してくれる人と必ず出会えるところであること。また自分の気持ちを素直に表現してもそれが否定されないところであること。そして更にそこでは自分の意見が尊重され自分の役割が実感できるために自己肯定感が取り戻せるところであること、などである」（廣木（2005））とされている。

白井（1998）<sup>21)</sup>は青年心理学分野に属するが、「自己受容」は受容される場において高まるということ、「自己肯定」は成長できる場や安心できる場において高まるということを明らかにし、次のような関係図で表している。



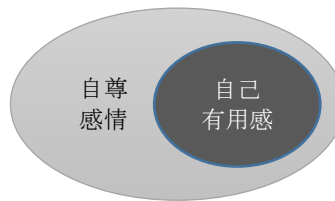
居場所と自己受容とセルフエスティームの関係

そこが「居場所」となるためには、まずは、自分がありのままの自分で「いること」が他者から受け容れられ、安心安全が保障されている場であることが根底になければならない。そこが自身が「いること」が保障されている場であることが実感できて初めて人は、「すること」への意欲

が生まれるのだといえよう<sup>22)</sup>。したがって、「居場所」の第一条件は、石本(2010)の「本来感」、吉川・栗村(2015)や白井(1998)の言葉では「受容」されているということが実感できる場所ということになる。そして、人間は「居る」ことが保障された次は、そこに「成長でき」たり、「役に立て」たりすることを求めるようになり、それが叶えば、そこが「居場所」となるといえよう。

### 3. 世代による違い

国立教育政策研究所(2015)<sup>23)</sup>では、「自尊感情」は、「自己に対して肯定的な評価を抱いている状態」を指す *Self Esteem* の日本語訳で、「自己肯定感」「自己存在感」「自己効力感」とほぼ同じ意味合いで用いられているとされている。それに対して、「自己有用感」は、「他人の役に立った、他人に喜んでもらえた、…等、相手の存在なしには生まれてこない点で、『自尊感情』や『自己肯定感』等の語とは異なる」とし、他者の存在を前提としない自己評価である「自尊感情」(自己肯定感)よりも社会性に結びついた「自己有用感」の育成を目指す方が適当だと述べ、「自己有用感」に裏付けられた「自尊感情」の育成が大事だとし、下のような図で「自尊感情」と「自己有用感」の関係を示している。



「子どもの徳育に関する懇談会報告<sup>24)</sup>」の中の「子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題」では、乳幼児期に重視すべき課題は、「愛着の形成」「充分な自己の発揮と他者の受容による自己肯定感の獲得」などが挙げられているが、ここでは、「受容感」がもっとも必要とされているといえる。

学童期に入り、小学校高学年になると、「自己肯定感の育成」や「自他の尊重の意識や他者への思いやりなどの涵養」や「集団における役割の自覚や主体的な責任意識の育成」などが課題となり、「自己肯定感」「自己有用感」の育成が課題となってくる。

青年中期(高等学校)になると、大人社会の直前の準備時期と位置付けられ、青年前期(中学校)よりも社会の一員としての意識が求められる。

社会人になり、さらに家庭を持つようになると、自分の「役割」を果たすことに対する意識と責任が大きくなり、「自己有用感」が必要となってくる。

以上のことから、世代によって、違いはあるものの、人間が「居場所」に求めるものは、「受容感」と「自己肯定感」だといえよう。さらに、「自己肯定感」が「自己効力感」(自分ではできる、という感情)に留まらず、他人や社会の役に立てるという「自己有用感」まで至ったときに、よ



り一層人間は心理的に喜びを感じるのであろう。

#### 4. 世代を超えた「居場所」の定義

以上のことから、その場所はその人の「居場所」になるために必要なものは、その場所では自分は受け入れられる、否定されない、という「受容感」、その場所で、成長することができるという「自己効力感」、その場所で役割・出番があり、「役に立っている」という「自己有用感」だと考える。

「受容感」が世代に関わらず「居場所」に必要なものであるのに対して、「自己効力感」は、幼児期から芽生えるものではあるが、「家庭」という場から「学校」という場にも所属するようになってからより顕著に生活していくうえで必要になってくるものであろう。

「自己有用感」も「家庭」や「学校」でも「役割」が与えられるようになれば、意識するようになるが、生きていくうえでもっともそれが重要な位置を占めるのは、社会に出て「職場」で役割を与えられてから、「家庭」を持ち、そこで役割を与えられてからであろう。

「学校」という場において、「居場所」になるために「自己効力感」がもっとも大きな位置を占めるのに対して、「学校」卒業後、「職場」に属し、「家庭」を持つと、「自己有用感」も大きな位置を占めることになるであろう。

その後、仕事をリタイアし、「職場」という「居場所」がなくなったり、子どもが独立して「親」という役割がなくなったりすると、我々は急に「居場所がなくなる」ことになってしまう。我々は「受容感」や「自己効力感」や「自己有用感」を得ることができる「居場所」を見つけなければならないことになる。死ぬまで「受容感」「自己効力感」「自己有用感」のある「居場所」があれば幸せであろう。

ところで、大学生というのは、社会人になる前の準備段階で、「学校」という「居場所」から「職場」という居場所への移行段階にある。大学生において大学が社会に出る前の「居場所」としてどのようなものであるべきか、次の章で考えてみたい。

## IV. 大学生の居場所

### 1. 前任校での取り組みから

2000年前後から全国的に大学生の学力低下、それに伴う留年率、中退率の増加が問題視されたが、前任校 K 大学でも、学習意欲が低く、このことが自尊感情も低くし、就職意欲も低くなり、就職できなかつたり、就職してもすぐに辞めてしまつたりする学生が増えてきて、問題になっていた。K 大学では就職意欲を高めるために、2005 年度から 1 年生からキャリア教育を始めた。この点では非常に先進的であったが、全学的な初年次教育がないという点では遅れていた。

「就職意欲」が高まれば中退や留年もなくなり、「学修意欲」も高まるだろうと 1 年生から始ま

ったキャリア教育だったが、2005年度、2006年度、2007年度と3学部平均の単位取得率は54%、57%、78%という値で、学部によっては30%を切るところもあった。これではいけないということで、2008年度に全学的な初年次教育を担当する部署ができたことをきっかけに、初年次教育とキャリア教育を合体した形でキャリア型初年次教育を実施することとなり、筆者が中心となってプログラムを作成することとなった<sup>25)</sup>。

大学が学生の「居場所」となるには、大学での学生の「意欲（成長意欲）」を高めることが必要だと考えた。そして、「意欲」を高めるために必要な要素として、まず、1)自分に自信が持てる(自尊感情が高い)。そのために、自分の持つ能力・可能性を見出し、自分で認められること、そして、2)その能力・可能性を見つけ、伸ばしてくれる環境に自分がいる、という安心感、帰属意識を得ることが必要だと考え、この2つのことが可能となるようなプログラムを作ることに尽力してきた。その結果、2008年度以降は単位取得率の3学部平均が95%前後を推移するようになり、プログラム終了後の学生アンケートでは、「自尊感情」と「帰属意識」が高まったことを学生自身が意識するような結果が得られた<sup>26)</sup>。

「帰属意識」を高めるためには、在学生の先輩、卒業生で社会で活躍している先輩から話を聞いたり、学部や大学の先生を知ったり、学部・大学で取得できる資格や体験できることについての話を聞いたりすることが有効であることがわかった。

「自尊感情」を高めるためには、過去の自分の頑張りを振り返ったり、将来の目標を考え、自分のライフプランを立てたりすることが有効だった。また、「帰属意識」を高めるために、「共に学び合い、高め合う」ことをコンセプトとした「協同学習」という授業方法を取ったが、これも功を奏した。学生自身が、共に学び合い、高め合う周りの学生と、ファシリテーターとしてサポートする教員を『仲間』として意識することにより、この仲間たちで協力し合ってこれからの大学生活4年間頑張っていくんだという安心感とともに、仲間との助け合いの中で、学びの経験を積むことで、学ぶことや考えることの楽しさを味わったり、自分ひとりでは発見しにくい自分の能力や、それを今後この大学、学部でどう生かしていったらいいかを、仲間の協力を得ながら、発見でき、将来に夢や希望を持てたことで「自尊感情」が高まることもあった。

また、アクティブラーニングにより、積極性やコミュニケーション力がついたと感じる学生も多く、このことが「自尊感情」を高めている例も見られた。

## 2. 大学生の居場所の条件

この前任校での取り組みの結果から、大学生にとって大学が「居場所」となるためにも、①帰属意識（受容感）と②自己効力感が必要だということが確認できる。

大学での授業をはじめとする、クラブ・サークル活動も含めたさまざまな「学び」の中で、そのように感じられた学生にとっては、大学が「居場所」になることができるだろう。反対に大学内に自身の成長を感じられるものが見つけられない学生にとっては、大学に居る意味が感じられないかもしれない。

できれば、自分の成長が感じられる「学び」の場は、複数あったほうがいいし、固定的でないほうがいいであろう。クラブ推薦で入学してきた学生で、そのクラブで自分の夢が叶えられない、つまり、そこで満足感が得られないとみなした場合、退学してしまう学生や、大学ではなく、アルバイトにやりがい、自己効力感を見出して、退学してアルバイトを仕事にしてしまう学生もいる。大学の中でさまざまな「学び」、「成長」の可能性を見つけられる学生を育てることがたいせつであり、これは社会に出てからも必要な能力だと考える。

以上のことから、大学という場が大学生の「居場所」となり、学生たちの学修意欲・就職意欲を涵養する場となるには、「自分は、自身の能力・可能性を見つけ、それを伸ばし、成長することが『できる』」という「自己効力感」と、「自分は、自身の能力・可能性を見つけ、伸ばしてくれる環境に『居る』」という「帰属意識」の2つを学生たちに喚起させる場でなければならない。

## V. 流通科学大学が学生の居場所となるために

### 1. 気づきの教育（初年次教育）

流通科学大学の「学び」の大きな特徴の一つに、入学後半年間は、通常の学部の授業は行わず、「なりたい自分発見カリキュラム」と称して、自分の興味、そして、将来の目標を見つけるためのカリキュラムが実施されるというのがある。その核となっている「自己理解とキャリア開発」という科目は、1週間に8コマで1クラス40名弱のクラスに分かれ、教室ではグループを主としたアクティブラーニングプログラムが展開される。教室内だけでなく、コミュニケーションキャンプやフィールドワークに行ったりすることで、より一層学生間および教員との関係が深まる。在学生や卒業生の先輩の話を聞くことで、帰属意識が高まるとともに、素晴らしい先輩の存在を知ること、「自分もできる（かも）」という「自己効力感」も高まることが期待できる。また、大学のことを知るプログラムではこの大学の学生だという大学への「帰属意識」が高まることも期待できる。

また、アクティブラーニング方式の授業の中で、グループワーク内の自分の役割の意識と役割に対する責任感も生まれ、「自己有用感」が磨かれる。

最後の振り返りアンケートの「この授業で得られたこと」という自由回答項目では、「友だちが増えた」「コミュニケーションが取れるようになった」というものが多く、「自己存在感」「自己効力感」の獲得が確認されている。

また、学科ごとの「学科へのいざない」科目では、学科の先生や仲間と学び、学科での学びを知ること、学科への「帰属意識」を高めることが期待できる。

### 2. アクティブラーニング

流通科学大学の「学び」もう一つの大きな特徴は、アクティブラーニングの機会が非常に多い

ということである。各授業科目でのアクティブラーニングは、多くの大学が取り入れるようになってきているが、本学の場合は、それに加えて、学内でのさまざまなチャレンジプログラム<sup>27)</sup>や、多数の企業や自治体、団体と連携し、企業や地域の課題を解決する「課題解決型学習 (PBL: Project Based Learning)」型のプログラムが非常に多いのが特徴である。

このようなプログラムにチャレンジすることで、このような「成長」の機会を与えてくれる大学、および、共に行動をする学生・サポートする教職員との仲間意識から大学への「帰属意識」が高まる一方で、チャレンジする自分、頑張る自分、やればできる自分を実感しながら「自己効力感」や、チームでひとつの目標に向かって各自が自身の役割に責任を持って遂行していくなかで「自己有用感」が実感され、高まることが期待できる。

このように、本学では、「居場所」となるための条件は揃っているといえる。

### 3. 教職員の対応

このように本学には、「居場所」となるための条件を提供するプログラム、つまり、大学が学生にとっての「居場所」となるための条件のうち、ハード面はかなり充実しているといえよう。

次に必要となるのは、これらのプログラムをうまく学生たちにつなげ、学生たちがこれらのプログラムを活用し、その中で「帰属意識 (受容感)」・「自己効力感」・「自己有用感」を獲得し、これらが高まるよう、プログラムを進めていく人たち、ソフト面での充実が必要となる。せっかく素晴らしいプログラムがあっても、それを活かさなければ、「宝の持ち腐れ」となってしまう。

これらのプログラムを運用する側にある教職員は、プログラムの意図や、それぞれの場面、段階で学生たちにどういう力、意識を身につけさせようとしているのか、身につかせるべきなのかをきちんと理解したうえでプログラムを運用することが大切である。

そして、このプログラムを通じて、学生が「やればできる」という『成功体験』を重ね、自信をつけていくこともたいせつだが、一方で、「やったけれども思った結果が出なかった」という『失敗体験』を重ね、『失敗』にも『へこたれず』、失敗から学び、また、チャレンジできる力も大学生のうちに身につけておくことが、社会に出たときの「自己効力感」につながっていくと考える。

## VI. おわりに

本稿では、高齢者の「居場所」の成功例のいくつかを取材することにより、高齢者の「居場所」の条件として、(1) そこに安心していられるという「受容感」、(2) そこで新たな学びがあり、自身が成長していると感じられる「自己効力感」、(3) 自分がそこで役に立っている、そこに役割・出番があるという「自己有用感」が必要であることを述べた。そして、(1) (2) (3) はそれぞれ包含関係にあり、(1) だけよりは (2) まで、(2) までよりは (3) まで条件が揃うほうが、特に、以前に家庭や職場で『役割』を持ち、「自己効力感」の高かった高齢者にとっては「居

場所」となる可能性が高い。

それに対して、「学校」から「社会」へと「居場所」の移行期にある大学生にとっては、「学校」の存在意義でもある、ここで「成長している・成長できる」という実感が得られなければ、学校が「居場所」になることは困難であるので、「自己効力感」は大学が「居場所」になるための必要条件であるにはちがいないが、学生生活で自分が「役に立っている」「役割・出番がある」と実感が得られているかどうかということについては、必ずしも必要なことではないが、さらにこれが実感できると学生生活がより充実し、「自己効力感」も増し、「自己肯定感」がより向上することはまちがいないといえる。

今後は、大学生や高齢者が「居場所」を得るために、どのようなもの（こと）をどのように提供すればいいのか、ということについて提供する側のありかたについて考えていきたい。

注

- 1) BPSD (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia: 行動・心理症状) とも言われ、脳の神経細胞が壊れることによって、直接起こる、記憶障害、判断力障害、実行機能障害、見当識障害と認知症の「中核症状」ではなく、周囲の人との関わりの中で起きてくると言われる、暴言や暴力、興奮、抗うつ、不眠、幻覚、せん妄、徘徊、物盗られ妄想、弄便、失禁などといった症状のこと。
- 2) 要介護 1 であった。(現在は、要介護 2)
- 3) 母が東京在住の妹と電話でデイサービスのことを話しているとき、「楽しいよ。『生きがい』ができて幸せ」という母の言葉を聞いて驚いた。
- 4) 暴言についても減多になくなった。
- 5) 内閣府『平成 28 年度高齢社会白書』による
- 6) ニッセイ基礎研究所 ハフィントンポスト
- 7) 森常人『ふれあい・いきいきサロン』の参加者評価の分析に関する一考察『関西外国語大学 研究論集』第 100 号,2014.9, 257-270
- 8) おたがいさんについては現地の見学はできず、加藤忠相代表の講演とおおいけあについて書かれた本や文献からの知識である。
- 9) ひがしまち街角広場、須磨いるサロン：日埜昭子代表、東灘こどもカフェ：中村保佑代表、シェア金沢：奥村俊哉施設長、三草二木西園寺：安倍真紀施設長、おたがいさん：加藤忠相代表、にぎやかについては、見学会に参加し、見学会対応スタッフ数名から話を伺った。
- 10) 阪神淡路大震災を機に 1998 年 5 月に設立 (2000 年 10 月に法人格取得) され、みんなの居場所「須磨いるサロン」とふれあいの居場所「の〜んびりサロン」からなる「ふれあいの居場所事業」の他、生活援助をする「地域助け合い事業」、ボランティアを送る「地域助け合い事業」、神戸市委託事業の「生きがい対応型デイサービス」、「ふれあい喫茶・食事会」といった活動をしている。
- 11) 居場所「こもれど」の他に、当初「なんでもお手伝いセンター」だったのが 2015 年 7 月に一般社団法人「東灘なんでもお手伝いセンター」とはり、2015 年 1 月には都市と田舎を結ぶ多世代交流の場「こもれど淡路+はっちょうめ駅」、2016 年 1 月からは、震災後配色活動をしていた「あたふたクッキング」も「あたふた甲南」として運営することになった。
- 12) デイケアハウス「にぎやか」の他に、認知症デイサービス「かっぱ庵」、デイケアハウス「にぎやか」「かっぱ庵」を利用していただいた人たちの終の棲家として同じ建物内に「にぎやか荘」も運営している。
- 13) 小規模多機能型居宅介護「おたがいさん」の他に、デイサービス「いどばた」、グループホーム「結」の 3 つの介護事業所を同じ敷地内で運営している。
- 14) 「こもれど」2016 年夏号 vol.5, 東灘こどもカフェ発行
- 15) 介護保険 (通所介護)、自立支援法 (生活介護、自立訓練)、児童福祉法 (児童発達支援、放課後等デイサービス)、日中一時支援、在宅障害者 (児)、デイケア事業の利用が可能となっている。乳幼児・学童など、制度にあてはまらない場合は、1 日 2500 円、半日 1500 円で利用可。
- 16) 富山県初の民間デイサービス「このゆびとーまれ」(1997 年開所) が富山型デイサービス発祥の地。2007 年に推進特区指定、2010 年から全国展開。
- 17) 石本雄真「居場所概念の普及およびその研究と課題」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科 研究紀要』

- 3-1, 2009
- 18) 石本雄真「青年期の居場所感が心理的適応、学校適応に与える影響」『発達心理学研究』第 21 巻第 3 号, 2010, 278-286
  - 19) 吉川満典・粟村昭子「大学生におけるアイデンティティの確立について—心理的居場所との関係性から—」『総合福祉科学研究』4, 2013 年, 35-41
  - 20) 廣木克行「臨床教育：子どもの居場所をつくる」神戸大学発達科学部編集委員会編『キーワード人間と発達』, 2005, 106-107, 大学教育出版
  - 21) 白井利明「学生は居場所をどうとらえているか—自己受容とセルフ・エスティームとの関連—」日本青年心理学会大会発表論文集(6), 34-35, 1998 年 10 月 1 日
  - 22) 中藤信哉「青年期における居場所についての研究」『京都大学大学院教育学研究科紀要』57, 2011, 153-165
  - 23) 国立教育政策研究所「『自尊感情』?それとも、『自己有用感』?」生徒指導リーフ Leaf.18, 平成 27 年 3 月
  - 24) 「子どもの徳育の充実に向けた在り方について」(報告), 文部科学省「子どもの徳育に関する懇談会」報告, 2009 年 9 月 11 日
  - 25) 西川真理子、若槻健、小野博司、金崎茂樹、錦織久雄、中西佳世子「『学生力』を高めるための『新教養演習 I』」『甲子園大学紀要』第 36 号 (A), 2009 年 3 月, 49-58
  - 26) 西川真理子、若槻健、中西佳世子、梶木克則、増田将伸、石川朝子「『学生力』を高めるための『教養演習 I』(4)」『甲子園大学紀要』第 40 号(A), 2012 年 3 月, 35-49
  - 27) チームで課題を見つけ、企画力を競う「学生チャレンジプロジェクト」や書評コンテストや論文コンテストなど様々なコンテストなどがある。

付記：本研究の成果の多くは、2015 年度流通科学大学特別研究助成費（研究課題：「高齢者の『居場所づくり』の成功例の取材レポート」研究者：西川真理子）の助成によっている。